

# 地域づくりのための インターンシップ 制度活用



福岡 晋也

NPO 法人  
アジア・フィルム・ネットワーク  
代表理事  
(松山市)

## インターンシップ制度の活用

私たちが、インターンシップ制度を活用し学生たちを受入れ始めたのは6年前である。

私たちアジア・フィルム・ネットワーク(以下、AFN)は、設立以来毎年、6年間インターンシップを活用している。そういう意味では私たちの団体にとって「インターンシップ」は不可欠な制度であり、学生たちは無くてはならないスタッフ、そして担い手でもある。

## インターンシップ制度の活用

私たちの団体は特定非営利活動法人(NPO 法人)で、愛媛に映画、ドラマ、CM等の撮影を誘致し、支援することで、地域経済の活性化や地域資源の掘り起こし、文化振興、観光客誘致等につながればと日々活動している。



初年度受入れた学生たち「道後・いつぺんさん」にて

## インターンシップからスタッフ、 そして担い手へ

また、ロケ地を探す段階で見つけた道後ネオン坂のにぎわい再生のための手づくり青空市「道後・いつぺんさん」等のまちづくり事業や、子どもたちの感受性を育むための「こども映画塾」等の人材育成事業も行っている。

設立当初はメンバーの年齢も高く、実行力という点ではマニアックなインターンシップ制度を活用

用させていた。ただ、このとき、この制度の受入れは企業ばかりで、私たちのようなNPO法人が受入れ団体として応募して学生さんたちが集まってくれるのだろうか？という不安があった。

しかし、説明会に臨んでその不安は消え去った。ボランティア意識の高まりからなのか、企業と違った変な団体に好奇心の触手を伸ばしたのか判らないけれど、私たちのブースの前に学生たちの列ができた。結果、初年度は12人の学生たちを受け入れることになった。

それから毎年、5〜10名程度の学生たちを受け入れているが、AFNでのインターンシップは企業のそれと違い、「こども映画塾」や「道後・いつぺんさん」での出店企画といった、実施事業の企画やプラン作成、プレゼンテーション、運営まで学生たち自身で行ってもらっている。

もちろん、指導的な立場でレクチャーやフォローは行すが、基本的には自主性



「こども映画塾」でナビゲーターを務める学生

## 特集 若者よ、地域へ行こう

を尊重し本人たちに任せるので、自ずと責任感も出てくる。

そして、毎年、数人がこのプログラムの終了した後も活動に参加してくれ、学生メンバーとして定着してくれている。その中には現在、AFNの理事として大きな役割を担っているメンバーや、AFNの活動に参加したことで映画製作に興味を持ち、東京で映画製作に携わっているメンバー、卒業後実家のある九州に戻り、地域のまちづくり活動を始めたメンバーなど、インターンシップをきっかけにAFNと一緒に大きく成長し、社会に羽ばたいている。

ただ、インターンシップで受け入れた学生全員がそうなる訳ではない。単位習



「こども映画塾」事前スタッフ打ち合わせ

得と割り切った学生もいるし、AFNの活動に興味を持ってないまま去って行く学生も少なくない。

### 学生定着のための要素と受け入れ側の責任

インターンシップ制度は、上手く活用すれば地域づくりの担い手育成に有効なプログラムだと思う。学生たちが地域にかけ地域と関わりを持ち、まちづくりや地域産業のことを一緒に考え、共に活動し、将来就職という形で地域に根付いてくれればそんないいことはない。しかし、学生が地域に来れば地域産業の活性化やまちづくりが保証される訳ではない。

そこでポイントになるのが「楽しさの提供」であると思う。学生たちが興味を持って、やりがいや楽しさを感じるまちづくりや事業への参加など、受け入れ側の体制や仕組みが必要であると思う。それは決して物理的なメリットということではなく、「人との関わり」、「自分の居場所」、「自分の



学生たちで運営する場内放送  
「道後・いっぺんさん：ドゴラチ」

存在意義確認」、「達成感」など精神的、人間的な欲求をどれだけ提供できるかだと思ふ。

今年度大学を卒業するAFNの学生メンバーの一人が、就職の内定を自ら辞退し、新たな企業への就職活動を始めた。その理由は、AFNの事業が土・日曜日に集中するため、それに参加できる土・日が休みの企業に就職したいということからだ。涙が出るほどうれいと同時に、私たちの責任も実感している。



「こども映画塾」子供たちとの記念撮影